



最後の防衛戦

1989年、ベルリンの壁が壊れ、東西ドイツはまたひとつになったが、それでかつてのような一枚岩の国家になっているのかといえば、現状ではその政治的、とくに経済的問題が大きく立ちはだかっており、解決にはまだ時間がかかりそうだ。

トルコ人をはじめとする外国人労働者に対する反感、ナチスの時代とはむろん規模こそ違うが、その人種的優越性を基調に置きユダヤ人排斥、右翼的テロを行なうネオナチの存在など、ヒトラー時代の残滓ともいえるような諸現象もマスコミを通じてよく耳にする。

ドイツは第2次大戦後、徹底した地方分権化、民主化、そしてナチ戦犯の追求を行なってきたり、これらは元来彼らが持っていた優れた行政能力によって、多くの効果を挙げてきている。しかし、それでも散見される上記のような現象に触れるたびに、ドイツという国は、宿命的に、なかなかその束縛から逃れることのできない極めてイデオロギー的色彩の強い政治背景を垣間見せてくれるようだ。

そしてこのドイツの思想、経済、政治と、国家にとってのすべての要素が集約的に具現され、象徴されている都市がその首都のベルリンであった。

この都市は、ナチスの時代以前からヨーロッパ第一の人口を持ち（1939年時で約432万人）、第1次大戦後はここを中心に時代を代表する文化人達が集い華やかな文化

が咲き誇り、この街単体でひとつの大きな文化圏を形成していたといってもよいくらいだった。

そしてヒトラーの台頭以来、その千年帝国の首都にふさわしい大ベルリン構想のもと、さらにこの街の重要性は強調された。仮にこの独裁者の野望が実現していれば、ここが全ヨーロッパ、ひいては全地球的規模での中枢となったのではないだろうか。

もちろん、ドイツは完全に敗れ、その首都も徹底的に破壊しつくされた。しかしベルリンはそれで存在を終えたわけではなく、次に迎えた冷戦の時代、世界を二分した米ソの対立関係のただ中に立たされ、その2つの世界の悲劇的な象徴としての役割を、数十年にもわたって負わされ続けたのだった。

ここでは、このドイツの象徴であると同時に、現代史に大きな地位を占める大都市ベルリンの歩みの中でも、おそらく最も大きなエポックとなった第2次大戦の最後をしめくくる攻防戦を、そこに参加した2つの師団の運命を通じて描いていく。

＋ベルリン正面における独ソの戦力

それまで、怒濤のような進撃を続けた（1945年1月12日～2月2日）ジューコフ元帥の第1白ロシア方面軍は、ベルリン正面の要衝、キュストリンにまで迫ってきていた。しかし慎重にも慎重を期したスターリンは、この時

ソ連軍に撃破され、炎上するドイツ軍のケーニクス・ティーガー



ベルリン正面における2つのドイツ機甲部隊の戦いを追う！

伊藤裕之助

期にきてドイツ軍の戦力を過大評価し、ここで部隊を足踏みをさせてしまい、その北と南の側面、ボンメルンとシュレジェン方面を2月から3月にかけて先に掃討させ、戦線をオーデルとナイセ両川に沿ったラインで縦に安定させてから、満を持してドイツの首都正面での攻勢にかかろうとしていた。

この間、北のドイツ軍ヴァイクセル（ポーランド名ヴィッスラ）軍集団SS第11機甲軍戦区のシュタルガルト・アルンスバルデ方面でその3コ軍団（東からミュンツェル集団、SS第3機甲、陸軍第39機甲軍団）が、ジューコフの尖頭戦区に北からの攻撃をかけている。

この2月15～18日にかけての“Sonnewende；ゾネヴェンデ（夏至）”作戦は、僅かに南進しただけですぐ撃退されたが、スターリンはさらにこれに続くSS第6機甲軍の投入を危惧し、それがベルリン攻撃を延期させる一要因ともなったようだ。むろん、この強力なSS機甲軍はここには送られず、本誌95年3月号にもあるようにハンガリーに投入されることとなる。

いずれにしても、1945年4月中旬時には、北からロコソフスキー元帥の第2白ロシア、ジューコフの第1白ロシア、コーネフの第1ウクライナ方面軍と巨大な戦力を有する3コ方面軍がほぼ縦300km以上に渡って並ぶ陣容となっていた。

そして、当初から攻勢の主役として準備を整えてきた

中央、ジューコフの第1白ロシア方面軍は、戦車、自動車化7コ軍団からなる機械化2コ軍、2コ騎兵軍団と97コの狙撃兵師団からなる10コ軍（その他8コ砲兵師団、8コ対空砲師団など）を持っており、両脇の2コ方面軍をふくめた総兵力は戦車6300輛、砲約41,600門、航空機6000機に達していた。

対するハインリキ將軍（ヒムラーの後任）の第1、第2白ロシア正面ヴァイクセル軍集団の第3機甲、第9軍は5コ軍団（師団またはそれに準ずる戦闘集団が18コ）、そしてフランクフルト・オン・オーダー、キュストリン、シュテッティンなど各要衝都市防衛陣などからなっており、他に3コの機甲、機甲擲弾兵師団の予備があった。

航空支援は第1航空軍団の300機程度、砲は第9軍だけで軽砲228門、重砲僅か24門と圧倒的なロシアのそれに比べると極めて非力であった。しかし、その対空砲戦力は充実していたようで、700門近くもの各種対空砲装備を持ち、それによって2000輛以上の車輛が従事したアウトバーンを中心とした交通物資輸送網はよく防備されており、西部戦線でみられたような空からの被害はかなり食い止められていた。

しかし、これらの数字だけでは見えない部分、兵士の質という点では、いうまでもなくこの末期では全戦線の著しく低下しており、一部精強な正規軍と共に、極めて多数の国民突撃隊、ヒトラーユーゲント部隊、あるいは

ドイツ軍陣地に向けて一斉射撃を行なうソ連軍のカチューシャ・ロケット弾部隊





総統官邸の庭で、ヒトラー・ユーゲントの青少年たちを激励するヒトラー。少年たちの多くは帰らぬ人となった

は訓練未了の海、空軍師団などが直接激戦区へ投入されることになった。ちなみにその18コ師団のうち、それまでに実戦経験のある師団は僅か5コ師団のみであった。

十ベルリン総攻撃

1945年4月16日早朝4時、その40,000門以上もの各種野砲、迫撃砲の斉射とともにスターリン最後の大攻勢が始まった。その巨大な規模は、5ヵ月前、ドイツ軍がアルデンヌ攻勢の時かき集められるだけ集めた砲が1000門、最大の砲戦力を投入したセヴァストポリ攻撃でさえ1300門だったことを想起すればわかるだろう。

しかしそれにもかかわらず、ロシア軍の初日の攻撃はスターリンの思惑とは裏腹に、予想外のドイツ軍の果敢な防戦にあって頓挫するのである。

1945年4月12日のヴァイクセル軍集団の編成

ヴァイクセル軍集団

(ゴットハルト・ハインリキ上級大将)

第3機甲軍

(エアハルト・ラウス上級大将)

フォン・テックウ軍団集団 SS第3機甲軍団

SS第10軍団

軍直轄部隊

SS第33機甲擲弾兵師団 “シャルルマーニュ”

ホルシュタイン機甲師団

第9軍

(テオドル・ブッセ大将)

オーデル軍団 第101軍団 SS第11軍団

SS第5山岳兵軍団 第56機甲軍団

軍直轄部隊

SS第10機甲師団 “フルンツベルク”

※4月30日の時点でベルリン市内において2コ軍を編成。ヴァイクセル軍集団は、第3機甲、第21、第12の3コ軍となった。

※本稿で記述した第25機甲擲弾兵師団は当初第9軍キュストリン要塞部隊に所属。4月20日付で第3機甲軍直轄部隊となり、ベルリン北方へ撤退。またミュンヘルク機甲師団は、第9軍第56機甲軍団へ所属。キュストリン防衛戦後はテンペルホーフ空港防衛任務につく。

大小河川や運河の多い攻撃には不向きな地形、要地、ゼーロ高地からの執拗な反撃のため、第1白ロシア方面軍の初期攻撃では思わしい進展が見られず、このためあせったソコロフスキー（この時点ではすでに第1白ロシア方面軍の指揮をジュコフから引き継いでいた）は、第8親衛軍チュイコフ将軍の「まず砲兵で叩いてから」という具申を無視して、その後詰である第1、第2親衛戦車軍を時期尚早にもかかわらず一気に投入、かえって戦線を混乱させてしまい、あたら作戦を害しただけで何の効果もあげられなかった。

戦況図を見ればよくわかるが、ドイツ軍はこのキュストリンの背後のゼーロ高地周辺に虎の子のミュンヘルク、クールマルク、第20の3コ機甲、機甲擲弾兵師団（後に第18機甲擲弾兵師団が増援に送られる）などの主力を投入して、よくロシア軍の大兵力に抗し、決定的な突破を防いでいた。

ソコロフスキーの南翼、ロコソフスキーの第2白ロシア方面軍戦区でも突破は成功しておらず（ただこの方面軍の主力が投入されたのは4月20日になってからであった）、満を持しての攻勢開始後数日、ロシア軍はそこを突破できずにもがき、スターリンは立腹していた。

しかし、抵抗するドイツ軍もその限られた戦力でいつまでもこの大攻勢を押し止めるだけの力がないことは明らかで、その防衛ラインが崩れるのもまた時間の問題であった。すでに限界になった各拠点はじりじり押され、4月18日、ロシア軍はやっとゼーロ高地を抜けることができ、続く19日には第9軍の司令部があったフリュステンヴァルデの北数kmのミュンヘルクを越えて進撃することができた。ここで、ようやくソコロフスキーは機動戦に適した場所を手に入れ、その軍を広く展開させることができるようになったのである。

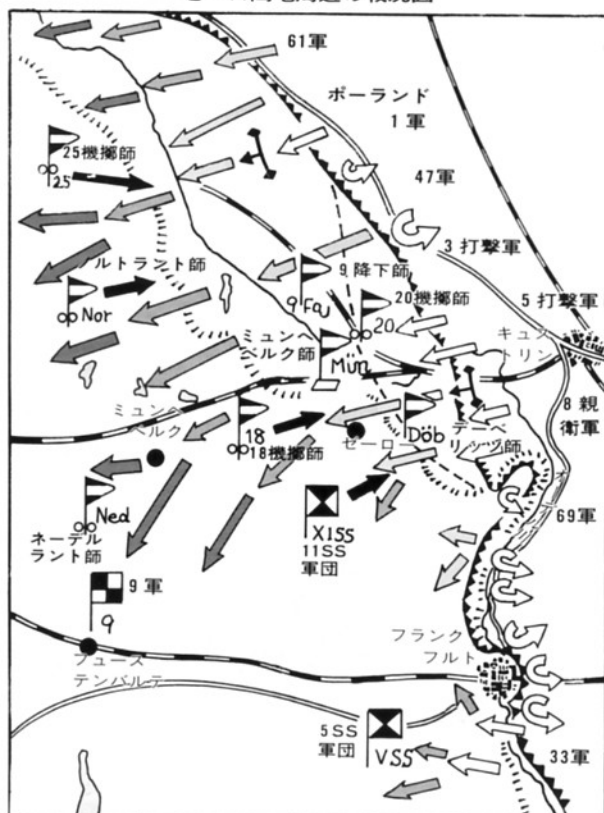
このように、第1白ロシア方面軍が初期の目標を達成できずにもたついている間、その南翼のコーネフ元帥の第1ウクライナ方面軍戦区では、決定的な動きを見せていた。

ここでの攻勢で対峙したドイツ中央軍集団左翼、グレーザー将軍の第4機甲軍は、コーネフの初日の攻撃による突破を許してしまい、以後、押し止めようのないロシア軍の奔流はベルリンの南東を突き進み、4月20日にはそのほぼ真南辺りにまで達するのである。スターリンは、すでに攻撃初日のソコロフスキーの攻撃失敗の後、コーネフの方面軍との協同作戦で二方面、南北からベルリンを包囲させる戦略に転じており、今やそれが成就されようとしていた。

4月19日、ヒトラーはミュンヘルク周辺まで達した敵に対して、ベルリン都市防衛部隊をふくめた第9軍の



ゼーロ高地周辺の戦況図



ソ連軍の攻撃

- ← 4月14日
- ← 4月16日
- ← 4月18日
- ← 4月19日

※ドイツ軍の部隊は主要なもののみ

← ドイツ軍の反撃

//// 急斜面

▲ 4月14日の戦線

--- 4月15日の戦線

ソ連軍部隊を迎え撃つドイツ軍機甲部隊

ることは不可能で、戦いはベルリンの玄関口まで来ていた。

＋ベルリンの戦い

一作戦第5日目の4月20日ーとジューコフは書いている。「クズネツォフ將軍の率いる第3打撃軍第79狙撃兵軍団の長距離砲が、ベルリンへの砲撃を開始した。これをもってドイツの首都に対する歴史的な強襲が始まったのである。いまやソ連の二元帥がベルリン一番乗りの競争に入ったのだった」〔「最終戦」W. パウル著 松谷健二訳、フジ出版刊より〕

ベルリン正面に立たされたブッセ將軍の第9軍は、その南東で囲まれ、ベルリン自体も今や完全に四方から包囲され（～4月24日）、最後の運命を甘受しようとしていた。ここにある各省庁の関係者達にも市街を離れるよう伝達された。ヒトラーは決意していた。「余はここベルリンで決戦を求めるか、亡びるかだ」（皮肉にもこの4月20日は彼の56回目の誕生日であった）。

ここに至るまでの、そしてこの後のロシア軍のベルリン市突入後の戦闘の推移は、様々な側面でもとらえることができるが、それを包括的に見ているは誌面が足りないだろう。ここでは、前記したようにベルリンをめぐる戦いのひとつの典型として、また純粋に軍事的側面のリサーチのひとつの断面としてこの戦いをとらえ、その焦点に絶えず置かれた2つの師団、そして末期の混沌とした戦いを象徴したヒトラーユーゲント部隊の戦いぶりを記し、彼らと共にベルリンがどのような戦闘を交えつつ破局へ至ったかを見ていこう。

＋逃れた運命・第25機甲擲弾兵師団

ロシアの主攻勢を正面から受けとめることになったヴァイクセル軍集団2コ軍（第3機甲、第9軍）の総兵力は約48万2000名程度。しかもその機甲戦力は、4月の頭に他の戦区に移動させられた総統擲弾兵、第25機甲擲弾兵、SS第10機甲師団の影響を受けかなり低下していた。これに対する補充としてハインリキは137,000名を要求したが、手に入ったのは3000名だけであった。そしてベル

全兵力をこの突破戦区に投入する決定を下した。彼は、その運命を賭けた決戦をベルリン市内で演じることを自ら放棄し、その主力を同市正面に置き、ここで最後の勝負をかけたのだった。しかし、かき集められるだけの予備兵力を投入したこの防衛も、いったん勢いに乗った圧倒的なロシア軍のスチーム・ローラーをもはやくい止め



ベルリンの市街地に突入したソ連軍のSU-12自走砲。4月20日以降、ソ連軍の各部隊は続々と市内になだれ込んでいった

リン防衛の要となった第9軍の中でも、最も強力な機甲戦力を有していた師団のひとつがこの第25機甲擲弾兵師団で、1945年4月7日時点で以下の戦力を持っていた。

V号パンター戦車34輛（内可動28）、IV号、IV号対空戦車など12輛、III号突撃砲30輛（戦車駆逐大隊に）。

これはこの土壇場としてはかなり強力な部隊といえ、この師団だけで第9軍全体の機甲戦力の1/6を形成していた。

師団司令部はヴリーツェンの数km、クーネルスドルフに置かれ（ミュンヘベルクの北）、第5猟兵、大ベルリン歩兵師団（もとの第309歩兵師団。この時期戦意高揚のため固有の名称を付けられた師団が次々と出現しており、例えばこの戦区には“デーベリッツ”歩兵師団などがいた）などとともに第101軍団に所属していた。そして4月16日の大攻勢時には、ヴリーツェン南東と東戦区でロシア軍の突破を阻止するため反撃に出たが、手に負えず、すぐに防戦に切りかえ、各師団とともに粘り強く戦いを続けていく。

グリースドルフ・ヘッツドルフ・ノイトレピンを結ぶ防戦に努め、その最後の町では麾下の第125機甲偵察ベルリン市内で戦い続けるドイツ兵



ドイツ・ヴァイクセル軍集団司令官ゴットハルト・ハインリキ上級大将



大隊が、最後の一兵となるまで頑強な抵抗を続けている。これを見ても、まだドイツ正規軍の一部は終局間近になっても士気は高く、果敢な戦闘力を保っていたことがわかり、これを甘くみたソコロフスキーは、攻勢初期に苦杯をなめさせられたのだった。

4月17日までに、師団は256輛の敵戦車撃破を報告、しかし無尽蔵のようなロシア軍は次から次へと押しよせ、師団はこのヴリーツェン戦区から離脱した。

重い前進となった第1白ロシア方面軍の攻勢も、突破に成功してからはドイツ第9軍と第3機甲軍の間を断ち切るような形で展開し、第25機甲擲弾兵師団の“戦闘集団”は、フィノウ運河の北に位置することになり、4月20日付で第3機甲軍の所属となった。

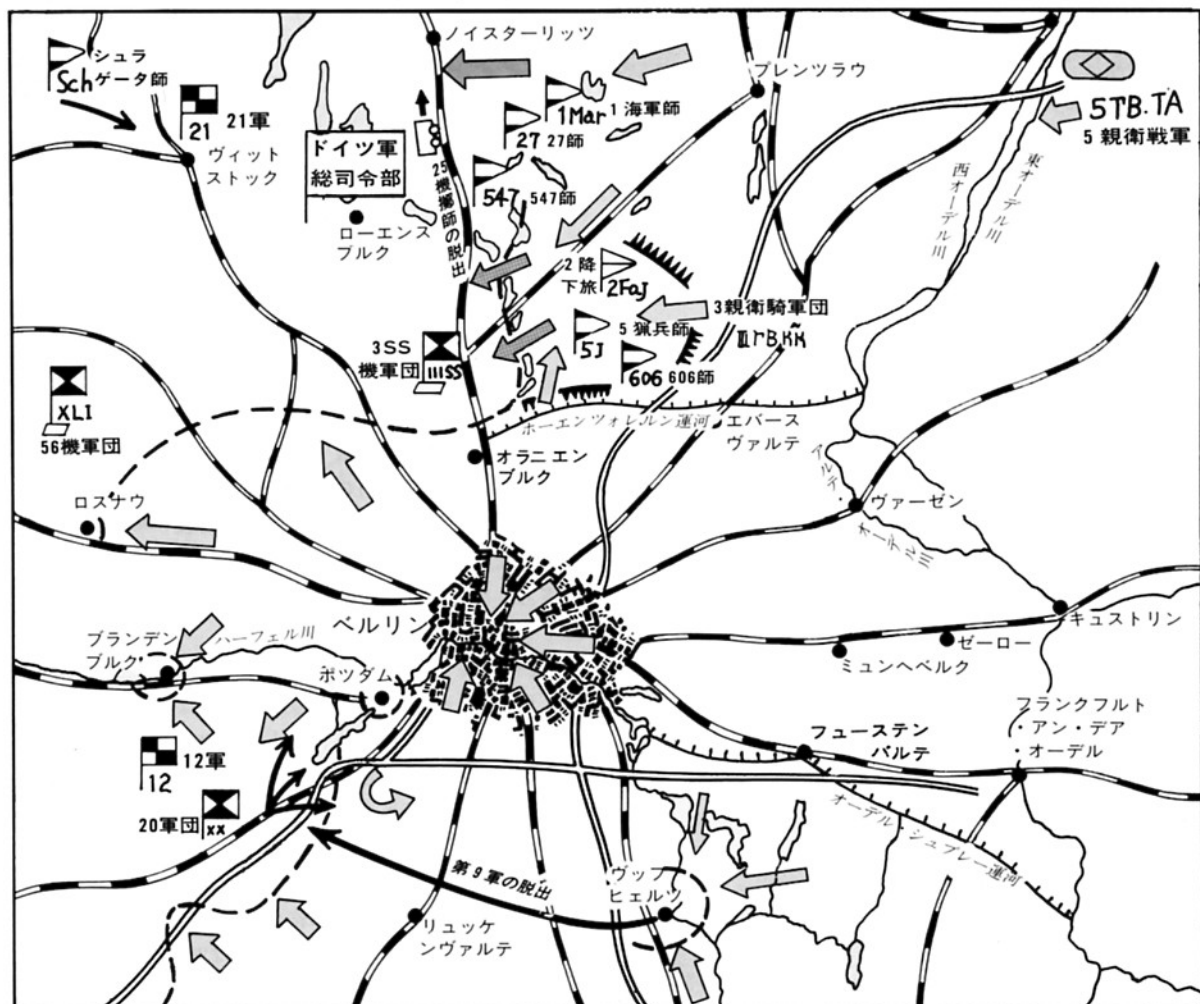
この後予定されていたエーベルスヴァルト（ベルリンの南東）から南への反撃は、陣を代わるべき海軍第3師団（やはり末期に現れた即席の歩兵師団で、この時期もはや活動する舞台のなくなった海軍兵士中心の部隊。この戦区では海軍第1師団の活躍がよく知られている）が

到着せず、続く23日、師団はゾーラーSS連隊と共にオラニエンブルク（ベルリンの真北）北西戦区へ移動、ベルリン救援が期待されていたシュタイナー将軍（軍団）戦闘集団の一部となり、ここから南へ若干の攻撃をかけた。しかし大勢は覆すべくもなく、もはや総ては無駄な試みとなっていた。

28日までにSS第3機甲軍団の所属となっていた同師団は、マクレンブルク、イノシュトレリッツと後退して行き、5月2日、プラッテークラドフで降伏することになる。

この師団は、もともとベルリンの南東に展開していた

4月28～29日にかけてのベルリン周辺の戦況図



4月28日朝の戦線 28日夜の戦線 28日のソ連軍の攻撃 29日のソ連軍の攻撃 ドイツ軍の移動・反撃・脱出

※ドイツ軍・ソ連軍とも部隊は主要なもののみ

ため、その後の戦闘の推移とともに漸次撤退が可能となり、ベルリンと運命をともにすることはなかった。それでは同市の正面に配置され、ロシア軍の波に押されつつ市内へ追い込まれそこで包囲、降伏の道を選ばされた師団はどのような戦闘を経たのだろうか。その典型として、もうひとつの師団を例に挙げて記していこう。

＋ベルリンと運命を共に・ミュンヘベルク機甲師団

1945年3月6日にミュンヘベルクで編成されたこの師団は、ベルリンの訓練学校やその他予備軍から兵をかき集めたいわば即席の機甲師団だったが、直ちにロシア軍



とのキュストリンをめぐる激戦に巻き込まれて大損害を受け、一時その兵力は900名にまで減少していた（この要衝からの脱出時までに50名の将校と1738名の兵を失っている）。

そして4月初頭時では、稼働、修理中もふくめ機甲戦力はⅣ、Ⅴ、Ⅵ号（ティーガーⅠかⅡか？）合わせて35輜程度となっていた。そして二度の所属変更の後、ロシアの大攻勢が始まる前日の午後になって、ヴァイトリンク将軍の第56機甲軍団の所属となり、嵐のような砲撃と続く圧倒的な赤軍のローラーをまともに喰らうのだが、よくそれに耐え、じりじりとヴェルヴィッツヒまで後退した。そして、激戦を極めたゼーロ高地周辺の戦いでも健闘した。その後、背後の自らの名称をつけたミュンヘルクまで撤退、ここの4月19日の晩には陥落している。

開けた土地へ出たロシア親衛戦車軍は、もはや押し止めることができず、包囲を逃れつつ西へ移動していく第

ベルリン市内で撃破されたSS部隊のSdkfz. 250装甲兵車



56機甲軍団は、4月21日までにベルリン外縁の防衛ラインへ到達。数日後市内へ入った軍団は24日、その首都の防衛システムに組み込まれるのである。

この時ベルリンは、すでに四方から完全に敵に包囲されており、この面積884km²（これは東京都の面積の約40%弱で一都市としては相当に大きい）程度の市の周囲には、親衛4コをふくむロシア8コ軍（！）が迫り、そこでは傷だらけとなった数コ師団（ミュンヘルク機甲、第18、第20、SS第11の各機甲擲弾兵、空軍第9降下猟兵師団などで、その実質は2コ師団程度の戦力）が、50～60輜程度の戦車とともに守りについていた。これらを中核としたベルリン市防衛の戦力は、6万名程度と見られている。

これには、18万程度という数字もあるが、やはり実質はこれくらいだったのだろう。もちろんの中には多くの国民突撃隊、労働者部隊、ヒトラーユーゲントの若者達（約5千名程度）が含まれており、さらに市には包囲後も何と300～350万もの一般市民がまだ残されていたのである。

もともとこの街の人口は前述のとおり430万くらい、そしてそれが1943年から本格化した空襲を避けるために婦女子、老人の疎開が続き、一時は250万人程度となったが、ロシア軍の西進とともに再びこの町に避難民が流入して、上記の数字となっていた。またこの包囲時、市中には12万もの乳幼児がおり、これに対するミルクの配給など問題はその防衛陣地構築などにとどまらず、多くが未解決のままであった。

こうした状況下で、彼らはこの後数日間に渡って、絶望的な戦いを演じなければならなかった。ミュンヘルク

◀激戦の末、広大な
廃墟となったベルリ
ンの市街

▶自殺したヒトラー
の遺体が焼却されたと
言われるベルリン
の帝国最高裁判所



ク機甲師団は市街南端のテンベルホーフ空港周辺で防備についていたが、圧倒的なロシア軍にはもはや抗すべくもなく、ロシア第150狙撃兵師団が市中央の国会議事堂を占領した4月30日、ヒトラーとその日に妻となったエヴァ・ブラウンは自殺し、大戦のひとつの大きな幕が閉じられたのだった。

ここに入城後、都市防衛司令官となっていたヴァイトリンク将軍も5月2日に降伏、ベルリン市は陥落し、各師団もここで運命が決められたのである。しかしその後も、ベルリンの激戦の余韻は残り、ここから脱出しようとする集団の戦いは続いていた。

その陣頭指揮を執ったのが、ミュンヘン機甲師団長だったムンメルト将軍であった（前記“最終戦”より）。彼はすでに1944年10月に剣付柏葉騎士十字章を授与されている機甲戦の猛者だが、彼のもとに集結した5000名ほどの兵、民間人混在の脱出集団は、その熾烈な突破の轟火の中で一部運に恵まれた者を除いて大部分が戦死、あるいは捕虜となってしまった。ムンメルトも途中で捕らえられ、1950年ロシアの収容所で死亡している。

＋エピローグ

ヒトラーはベルリンが包囲され、自分の官邸の目の前までロシア軍が迫ってきていたその瞬間まで、北のシュタイナー軍団、そして南のヴェンク将軍の第12軍からの救援、包囲網の解除を空しく信じ続け、最後は総てのものに裏切られた絶望感とともにピストル自殺を遂げた。

そして、この時彼の頭には、救援軍を受け入れるためと大義名分をつけられて市のピツヒェルドルフ橋の確保を命じられ、一人また一人と小さなタコ壺の中でパンツァーファウストを抱えたまま無意味に死んでいったヒトラー

ユーゲントの少年達の姿は、決して想起されなかったであろう。

戦争は、この後5月6日のドイツ無条件降伏をもって終わったが、独裁者がその千年帝国の夢の中で描いていたであろう、世界の中核として機能すべく計画された大ベルリンは、この時一塊の瓦礫の山になってしまっていた。

訂正：本誌1995年3月号50頁本文左段上から3行目の1994年とあるのは、1944年の誤りでしたので訂正いたします。

編集部

ソ連軍によって武装解除されるドイツ軍部隊

